

第一章 柩の館

1

イメージがあつた。

濃い緑、高原のような、なだらかな起伏。その中腹に西洋館が建っている。ポツンと、一軒だけ。周りには他の建物は無い。

雨が降っている。

格子の通ったガラス窓を、その激しくはない雨が伝っている。窓は、西洋館の二階だ。そして。

窓辺には、女がひとりうつむいて立っている。絶望。それは激しいものではない。ただ、誰も彼女の存在を知らず、救いにこない。

希望を失っているのだ。

雨は降りつづいている。霧のような霽もやのような、白いベールが視界にたちこめ、西洋館の輪郭をぼやけたものになっている。

はつきりとしているのは、窓ぎわに立つ、ガラスごしの女の姿だ。白い洋服を着け、伏せた目は、ガラスの反対側を降りてゆく水滴の軌跡を追っている。

あきらめている。自分を捨てているのかもしれない。

女が類たぐいまれな美貌ひぼうを持っていることは明らかだ。見覚えのない、しかし一度見れば忘れようのない、ほっそりとして、脆もろい美の雰囲気きふきを漂もよほさせている。白い肌は強い紫外線にさらされた経験きんけんがないことをうかがわせ、ときおり嚙かみしめる唇は、長い間、笑みを浮かべていないように見える。

孤独と絶望。閉ざされた者の悲しみ。

西洋館とそれを取り巻く風景には、容易にそれを感じとらせるだけの、外部との途絶があつた。

どこなのだろうか。

空気が冷たいことはまちがいない。標高の高い高原。森はない。あるとしても、西洋館の周辺にはない。拓ひらかれた区画くわのようだ。

譬たとえるなら、軽井沢のような別荘地だ。しかし、軽井沢ではない。

見渡す限り、他の住宅の存在がない区画くわなど、軽井沢にはない。

そこはもつと外界から遮断された場所だ。

誰かが、それを目的に造りだした建物だ。何人とも会わず、言葉を交すことすら不可能にするために。

イメージは再び女に戻る。
女の顔に浮かんでいる絶望は、死や暴力に対する恐怖から生まれたものではない。そういったものを恐れる女には見えない。むしろ「死」には安堵すら抱くかもしれない。死は、彼女を解放する。

そこにある絶望は、ただひっそりと朽ちていく自分に向けられたものかもしれない。叫ぶことも泣くことも、女は忘れたかのように見える。

心の奥深い部分に感情を埋め、石のように堅く閉ざしている。自分の境遇に何の変化も訪れぬことを確信しているからだ。

救いは、ない。

だしぬけにベルが鳴りひびいた。それが西洋館の中からでないことは確かだ。イメージには音はなかった。それに、あの建物には、電話などというコミュニケーションの手段はない。

御岳雄一郎は目を開いた。

眠っていた、という意識はない。目を閉じ、網膜のスクリーンに映し出される画像を見ていた——感覚だ。

ベルはイメージの中で聞いたものよりはるかに柔らかな音で鳴っていた。同時に青いランプが明滅している。

巨大なチェアから上半身を起こし、御岳は右手をのばした。デザインの粋をこらした電機機から受話器をつかみあげる。同時に消えたランプの右横には、青い液晶文字が「M.I:08」の時刻を表示していた。

「眠っていたの？」

女の穏やかな声が御岳の耳に流れこんだ。

「いや、そうではない、と思う」

御岳はいつて立ち上がった。受話器はコードレスで、一瞬だけサーツといった雑音を流した。

室内は暗い。横たわっていたチェアの前のデスクにおかれたスタンドだけが明りを点している。

御岳は窓ぎわに立つと、閉じたブラインドのコードを引いた。羽がわずかに持ちあがり、眼下に広がる二十四時間眠らぬ街からの光線が、スタンドよりもはるかに強く、御岳の目を射た。

タクシーと、獲物を求める若者たちの車が狭い坂の上下に連なっている。

御岳は羽を閉じ、室内に向き直った。壁にかかった四十号ほどの青い都会の絵がスタンドの光を反射し、その額のガラスの端に、御岳が映っている。

四十代初めの、長身で彫りの深い顔立ちをした男だ。高い鼻梁と対照的に、凹んだ眼窩とひき結んだ口元には濃い影ができています。

「また見たのね」

受話器の中の女がいった。それは咎^{とが}めているのではなく、御岳に対する気遣いを表わした口調だった。

「そうだ」

御岳はチェアに戻ると、デスクの上の箱から煙草をつまみあげた。

火をつけ、空調のきいた室内に漂い出す煙を目を細めて追った。

「同じ映像なの？」

「同じだった。何ひとつちがわない。これで八度目か九度目だと思う」

「呼ばれている？」

「かもしれない。俺には確かめようがない」

御岳が言葉を切ると、室内の静けさが肌にしみた。盛り場の中心に位置する高層マンションは、不自然なまでに秀れた防音機構を備えている。

「待ってみる？」

「いや。動くべきときだろう。老人は『使命』がある、といった。俺たちは、それとひきかえに、今を得た」

御岳がいうと、女はそっと息を吐き出した。

「九年たっているわ。それにあれきり、あの老人と会っていない」

「だが約束をした。老人は約束を守ったんだ」

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。